



STOP! 読書離れ

先月、文化庁が発表した国語世論調査で、読書離れが進んでいるニュースが話題となっていました。文化庁の担当者は、出版業界から「本を読まない人は二人に一人程度」との情報を掴んでいたようですが、それを上回る6割の人が、月に一冊も本を読まないという結果で驚きを隠せなかったようです。この読書離れですが、理由は「スマホ・タブレットなどに時間が取られる」との回答が最も多く、43.6%を占め、「仕事・勉強で多忙」が38.9%と続きます。これまでは「仕事・勉強が多忙」という理由がトップでしたが、「スマホ・タブレット」にその座を譲りました。その傾向は若い世代ほど顕著でした。さらに、読書離れを加速しているのが、情報環境の変化があるようです。一つ目は「TikTok」に代表される「ショート動画」を提供するSNSが普及したことです。その視聴者は、スマホで動画や画像を見る時間を使うことが多くなったと分析されています。二つ目は、SNS



ならではの文章に慣れたことです。詩や物語などを読むときに、書かれている字面以上に行間に隠された意味や、言葉そのものに含まれる感情を読み解くところに面白さがあります。だからこそ本という媒体が人間の歴史の中で大きな役割を果たしてきたのだと思います。しかし、SNSの文章は、短文で文脈をあまり意識せず、細切れの語彙が中心となっています。そこで、長文の本を読むには、読解力や創造力が必要で、さらに自分にとっては関心のない情報も提供されるので、それを避けている人が多いということが予想されています。このことは対人関係にも影響してきて、対人関係を苦手とする若者が増えてきているそうです。

こういう社会の風潮とは逆に、帯西では読書好きな子供たちが増えています。図書館の市野瀬先生によると「昨年、今年と全体の貸し出し数は増えています。その中でも文学の割合が増えているのは素晴らしいことだと思います。」という実態だそうです。読書をする子供は、登場人物や作者に感情移入したり、感情を読み取ろうとしたりします。また、作品中の人間関係や社会問題に関心を持ったり、新しい知識や経験を得たりすることもできます。読書によって、人間の共感能力を高めることに繋がり、これからのSNS社会を生きる子供たちにとって強い武器となるはずです。

学校百景⑳ ほっと一息スペース

保健室前には、ベンチが置いてあり、そこにはぬいぐるみもいます。ここは、子供たちの「リラクゼーション」の場所ともなっています。子供は大人に比べて知識も経験も少ないので、いろいろな場面でストレスを感じることもあると思います。そこで、「ほっと一息スペース」でリラクゼーションすることによって、ストレスを和らげるようになると思います。今日も休み時間に、ほっとベンチで一息ついて、ぬいぐるみを抱きしめて、また教室に戻っていく子供たちの姿がありました。

